

# **大学生のグローバル志向の現代的構造**

---

## **—ネオリベラリズム／ナショナリズムとの融合可能性—**

2025年6月22日(日)10:55-11:25

異文化間教育学会第64回大会  
@東京大学本郷キャンパス 赤門総合棟200

鹿児島大学 中等・高等教育接続センター  
**小林 元氣 (KOBAYASHI, Genki)**

[gminormorning@gmail.com](mailto:gminormorning@gmail.com)

# 本研究の背景

- 教育目標化する、グローバル化に対応するための資質・能力
  - ・国際イニシアチブが権威づけるグローバル・コンピテンス（丸山 2016）
  - ・政策目標としての「グローバル人材」の育成
- 2010年代における留学の効果検証の隆盛 しかし・・・
  - ・大半は満足度（主観）調査で学術的基準に満たない

「時間的・経済的リソースを費やした行為に自ら肯定的な評価を下したいのは人情であり、そこには当然ながらバイアスが作用することを研究者なら当たり前に想定すべきである。」  
(大西 2019, pp. 58-59)
- 心理的測定指標（BEVI）を用いた留学の効果検証
  - 「客観的評価に基づいて検証した大学生のグローバル・コンピテンス」（小松 2023）
  - 「測定可能なグローバル・コンピテンスの数と種類、質問の項目数と回答所要時間、導入費用の面」で留学評価に適しているとの判断（中村 2024, p.14）



留学前後でのグローバル・コンピテンスの客観把握と向上が目指されている

# 異文化間教育の目標をめぐる理論的課題 1

## 【課題 1】コスモポリタニズムはネオリベラリズムと対立的ではないか？

### コスモポリタニズム (河野 2015)

「すべての人間はその民族的・国家的な帰属にかかわらず、何よりもまず、人類というひとつの共同体に属する市民であるという考え方」

- ・多様な差異をもつ人々が協調・共生する公共圏の形成を目指す  
「市民的コスモポリタニズム」 (Delanty 2000=2004) ≈ グローバル市民性

### ネオリベラリズム (新自由主義) (Brown 2015=2017)

「もっとも一般的には、経済政策の全体を自由市場の肯定という根本原理に合致するように規定するもの」

- ・市場原理が等価交換から不平等な競争へと変質
- ・あらゆる領域が経済用語で形容され、人間存在は人的資本として形象化され、人間が連帯する理論的根拠が失われていく

異文化間教育学が望ましさを想定してきたコスモポリタンやグローバルシティズンシップのような資質・能力について、ネオリベラリズムによる変容可能性が繰り返し指摘されてきている (Weenink 2008; Shultz 2007など)

# 異文化間教育の目標をめぐる理論的課題 2

【課題 2】コスモポリタニズムはナショナリズムと対立的ではないか？

コスモポリタニズムにおけるグローバル正義論



- ・生存のための資源分配の公正を国境を越えて問う議論（橋本 2021）
- ・グローバルな経済格差構造における先進国の道徳的義務に対する問題提起（Pogge 2008=2010）

ナショナリズム

- ・「自らが所属するネイションを尊重する意識と行為」（大澤 2014）
- ・ネイション構成員を包摂する論理／特定の社会集団を排除する論理



ネイション内の同胞の利益を優先する「常識的ナショナリズム」の論理

(Pogge 2008=2010) や、時の権力に対する滅私奉公を強要してきた

排他的ナショナリズムの歴史（Nussbaum 1996=2000）は、コスモポリタニズムやグローバル正義論の規範と対立する  
(少なくとも「整合しない」)（李・車・權 2024）と考える方が自然である)

# 留学の教育目標や尺度そのものの課題

## ○ グローバル・コンピテンスが内在するネオリベラリズム

「これらのモデルや枠組みの中に見られるいくつかの相違点は、容易に調整できないことが明らかな問題である。例えば、経済的競争力への志向と社会的正義や異文化理解への志向の違い (between an orientation toward economic competitiveness versus one of social justice and intercultural understanding) は無視できない」 (Engel et al. 2019)

## ○ 「グローバル人材」の前提にあるネオリベラリズム／ナショナリズム

「国益や国家の論理から人材開発を求める視点」 「本来、国境や国益から放たれるはずの「グローバル」な人材のコンセプトの中に、しっかりと二十世紀型・国民国家的なナショナルアイデンティティの主張がされている」 (恒吉 2016, pp.23-24)

## ○ 目標となる「望ましい教育効果」があらかじめ自明視されている

「しかしそもそも、教育効果が正確に測定されていないのだから（中略）現実的にどのような教育効果に対してどの程度の費用をかけるのが望ましいのか、誰にも判然としない」  
(大西 2019, p.59)



しかしながら、理論的課題に鑑みれば「教育効果の正確な測定」の前に、「何を教育効果として設定すべきか」がまず問われるべきではないか

# BEVI（を用いた研究）の課題

## ○ 多元的に生起するコスモポリタニズムを一元的に評価している？

「BEVIの各尺度は、1から100までのポイントで表示され、世界各国から収集したデータ全体が50となるように設定されている」（中村 2024, p.16）

## ○ 自己変容に主眼が置かれ、ナショナリズム／ネオリベラリズムに関する態度を掘り下げて検証できない

- ・ 例えば“*We should do more to help those who are less fortunate.*”の項目に関して、コスモポリタニズムの文脈では「恵まれない人」の範囲をどのように設定するのかが重要

## ○ 分析結果がネオリベラルな解釈と教育実践を生む可能性

「本調査対象の大学で、留学を通じたグローバル人材育成を目的としていることを考えると、現在のように学生のグローバルな感覚がBEVIの世界平均に達していない状況は、危機的な状況である」（中村 2024, p.19）

- ・ コスモポリタニズムの能力化、経路依存性が捨象された統一尺度化、それを用いた人的資本評価の国際比較という、グローバルコンピテンスが批判してきたポイント（Engel et al. 2019）を踏襲した分析デザイン？

# 本研究の問い合わせと理論仮説

## ○ 規範的・実践的な問い合わせ

日本の高等教育を念頭においた異文化間教育学の実践において、  
〈望ましいグローバル志向〉としてのコスモポリタニズムは、  
グローバリゼーションにおいて無視できないネオリベラリズムと  
ナショナリズムとの関係の中で、どのように構想されるべきか

## ○ 研究上の問い合わせ

大学で留学教育を受ける前の新入生の心理構造において、  
グローバル（コスモポリタン）志向とネオリベラル／ナショナリストイックな意識はどのような関係にあるのか

## ○ 理論仮説

①グローバリゼーションのイデオロギーに駆動された日本の教育政策の人的資本志向と競争主義的な学力選抜システムにより、グローバル志向はネオリベラルなマインドセットを伴う

②「グローバル人材」というコンセプトが強調するナショナル・アイデンティティにより、グローバル志向はナショナリズムを伴う

# 調査概要

---

- **調査対象**

- 国立X大学2025年度入学予定者を対象とした悉皆調査
- 外国人留学生を除く全学部の入学予定者に対して、入学手続き時に Microsoft Formsによる回答を依頼

- **調査期間**

2024年11月3日から2025年3月14日

- **分析対象**

- 回答者のうち、分析に使用する変数において「答えない」と回答した者を除いた1,631ケース（母集団に対する有効回答率96.5%）

# 分析に用いる変数

## 1 グローバル（コスモポリタン）志向

日本の大卒若年層を対象とした小林 (2024) の「グローバル・マインディッシュネス尺度」（1990年代前半の米国大学生を対象としたHett (1993) をもとに作成）のうち、因子負荷の大きさを基準として項目を絞り込み、文言を一部改変（逆転質問化等）して作成

### ① 異文化への関心

「自分が慣れ親しんだ文化とは異なる多様な文化を学ぶことには、大きな価値がある」  
「私は文化的背景が異なる人々とコミュニケーションを取ることにあまり興味がない (R)」

### ② グローバルな自己効力感とつながり

「世界をよりよくするため、私はグローバルな課題の解決に関わりたい」  
「地球規模の問題に対して私にできることはほとんどないと思う (R)」  
「私は外国人々にとても親近感を感じる」  
「自分自身をグローバル社会の一員だと感じることはあまりない (R)」

### ③ グローバルな責任意識

「外国で災害や紛争により多くの人々が命を落としたというニュースを聞くと、何か自分にできることがないのかを考える」  
「遠く離れた国で起きている問題に対して私が責任を負う必要はないと感じる (R)」

# 分析に用いる変数

## 2 ネオリベラルな意識

経済的グローバリズムと自由競争の肯定 (Brown 2015=2017)

や「ネオリベラル多文化主義」(塩原 2012)をもとに新たに設定

「グローバルな経済競争は平等であり、適者生存を促進するので維持されるべきだ」

「移民は日本社会の役に立つ場合のみ受け入れるべきだと思う」

## 3 ナショナリストイックな意識

ナショナリズムに関連する項目 (Hett 1993) と「グローバル人材」育成政策の趣旨を踏まえて新たに設定

「日本はもっと世界から評価されるべきだと思う」

「私は将来日本のために活躍したい」

## 4 海外活動志向

コスモポリタンなマインドセットに加えて、将来的に具体的な海外活動志向を持つかどうかを検討するために新たに設定

「人生のどこかで外国に住むことはあまり想像できない (R)」

「将来は国際的に活躍する仕事をしてみたい」

# 探索的因子分析結果 (n = 1,631)

	遠く離れた国で起きている問題に対して私が責任を負う必要はないと思う (R)	.626	-.014	.001	-.078
	地球規模の問題に対して私にできることはほとんどないと思う (R)	.596	.017	.026	-.005
グローバルな連帯意識	外国で災害や紛争により多くの人々が命を落としたというニュースを聞くと、何か自分にできることはないのかを考える	.538	.008	-.010	.164
	移民は日本社会の役に立つ場合のみ受け入れるべきだと思う	<b>-.428</b>	.111	.035	.167
	自分自身をグローバル社会の一員だと感じることはあまりない (R)	.375	.206	.010	.053
	人生のどこかで外国に住むことはあまり想像できない (R)	.000	<b>.784</b>	-.019	-.131
海外活動志向	将来は国際的に活躍する仕事をしてみたい	-.075	<b>.655</b>	-.018	.211
	自分が慣れ親しんだ文化とは異なる多様な文化を学ぶことには大きな価値がある	-.027	-.098	<b>.684</b>	.051
異文化への関心	私は文化的背景が異なる人々とコミュニケーションを取ることにあまり興味がない (R)	.026	.188	<b>.653</b>	-.102
	私は将来日本のために活躍したい	.010	-.099	.120	<b>.590</b>
ナショナリスティック/ ネオリベラルな意識	日本はもっと世界から評価されるべきだと思う	-.007	.049	-.090	<b>.459</b>
	グローバルな経済競争は平等であり、適者生存を促進するので維持されるべきだ	-.154	.071	-.009	<b>.346</b>

※ (R)は逆転項目

※ 4因子は全分散の55.8%を説明。

※主因子法、プロマックス回転

- ・ 「自己効力感とつながり」 「責任意識」 は同一因子→「連帯意識」 に
- ・ 「ネオリベラルな多文化主義」 を想定していた移民の「役立ち」 に関する設問は、負の値で「連帯意識」 因子に負荷  
→ 「役に立たなくても受け入れるべき」というコスモポリタンな連帯意識として表れている
- ・ ナショナリズムとネオリベラリズムは同一因子として検出

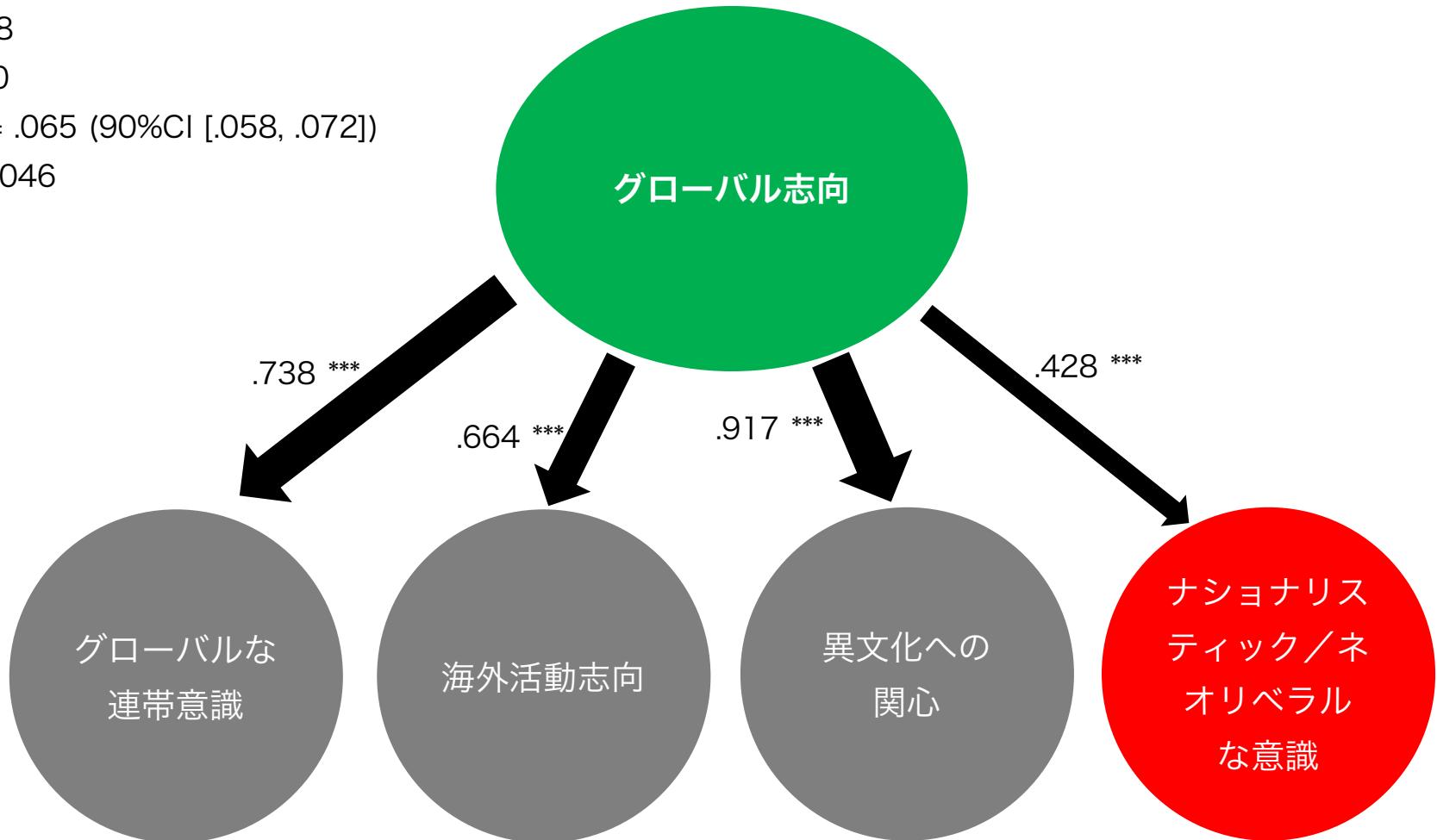
# 確認的因子分析結果①：2次因子モデル (n = 1,631)

CFI = .908

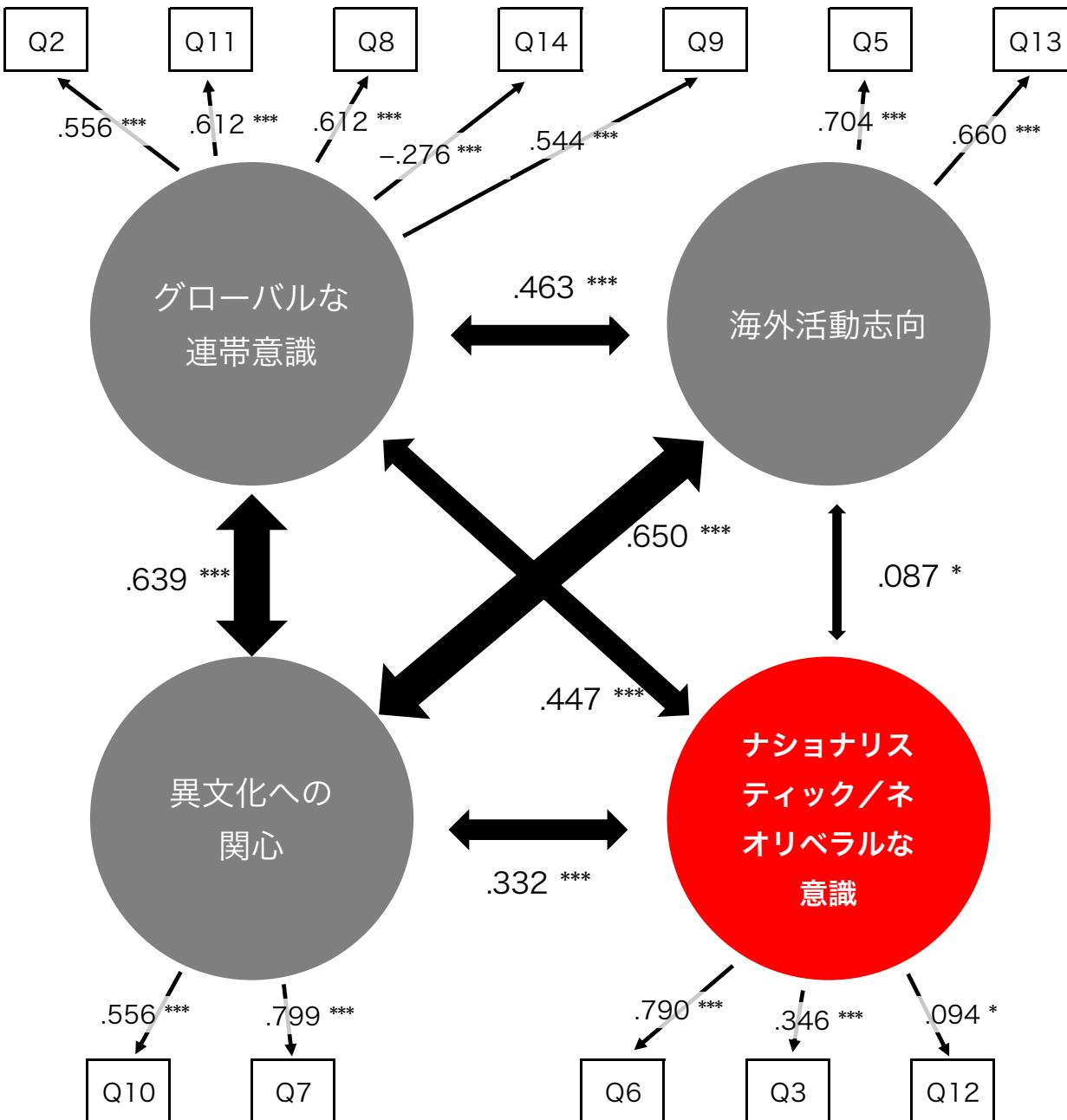
TLI = .870

RMSEA = .065 (90%CI [.058, .072])

SRMR = .046



# 確認的因子分析結果②：4 因子モデル (n = 1,631)



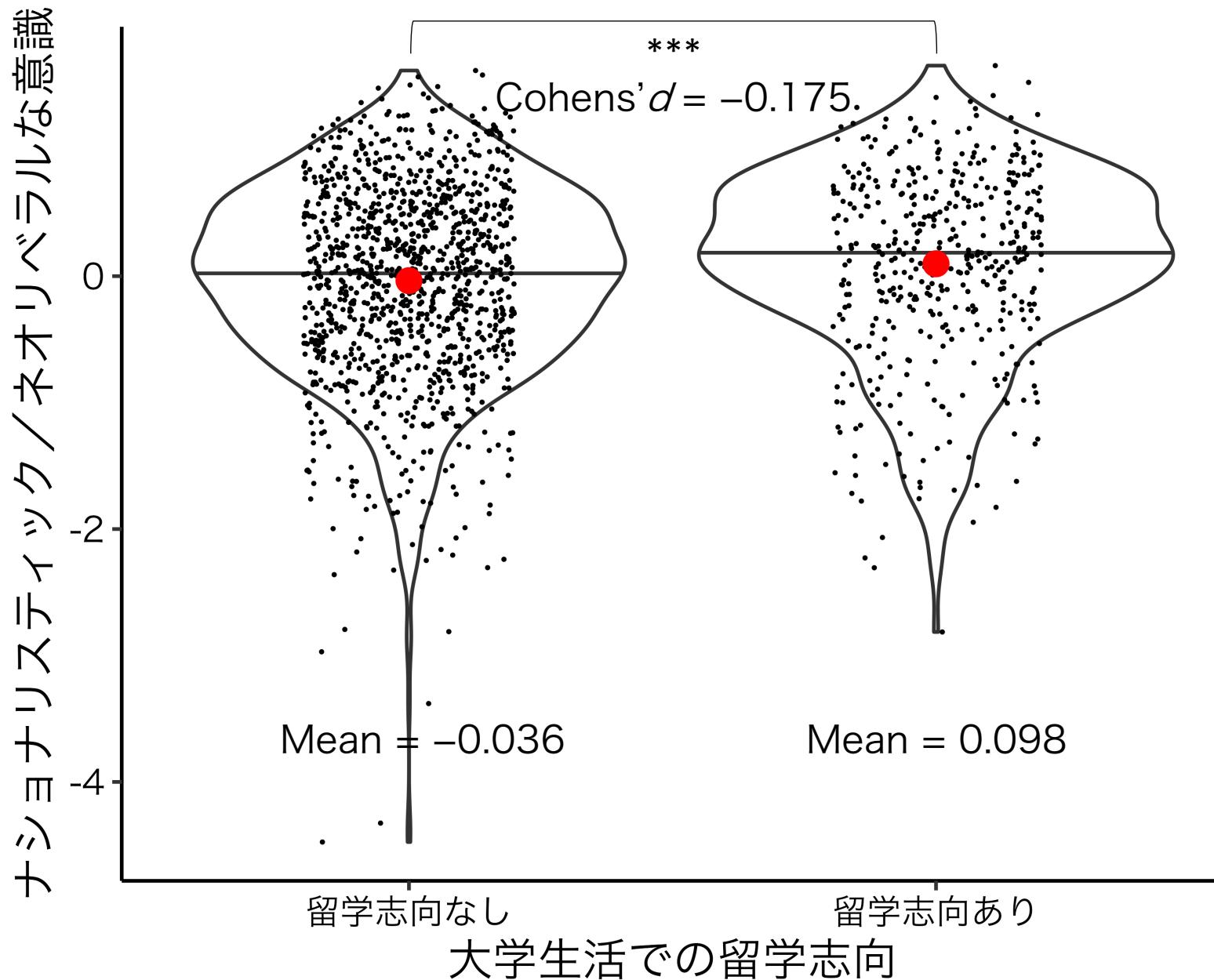
CFI = .929

TLI = .895

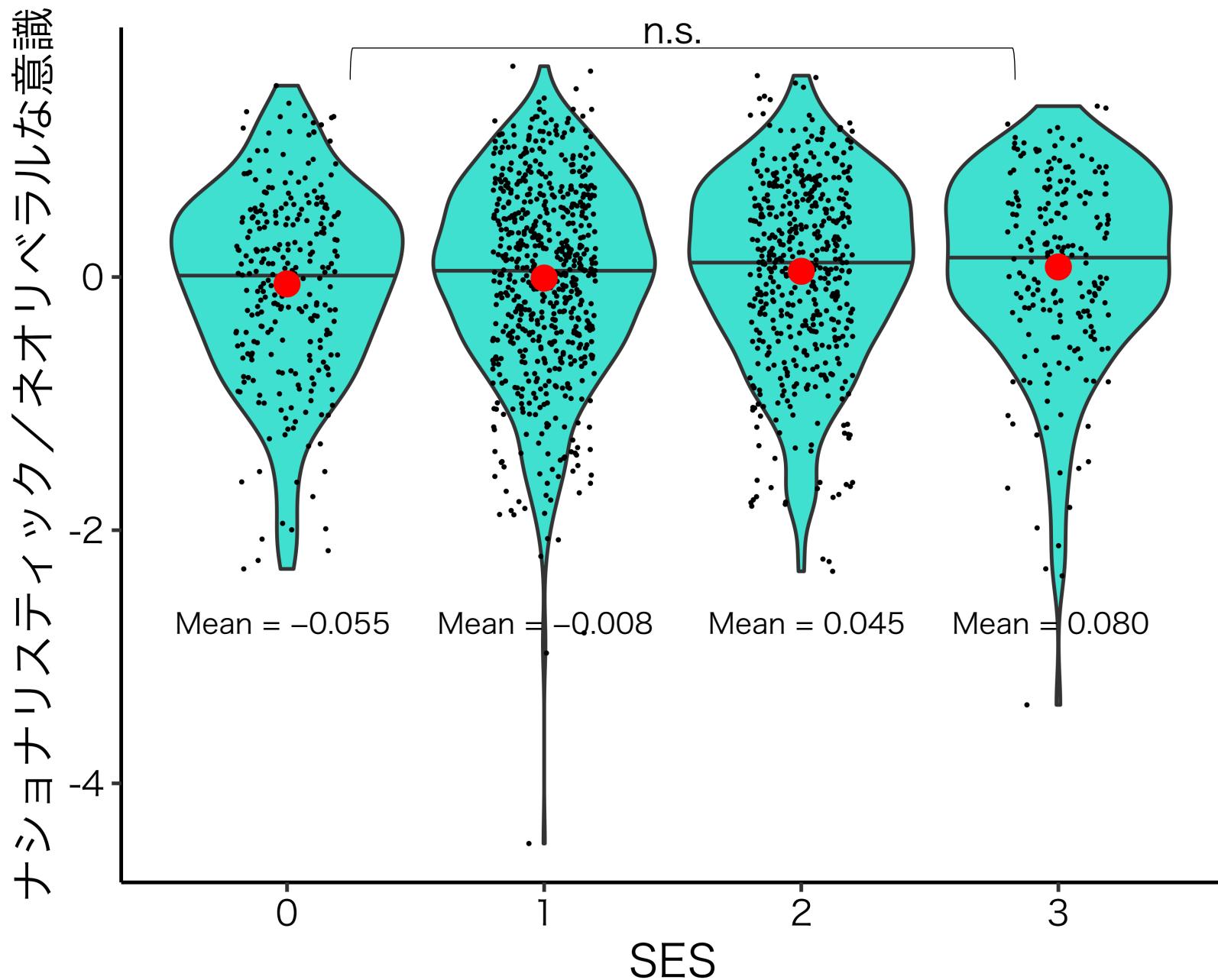
RMSEA = .058 (90%CI [.052, .066])

SRMR = .041

# 留学志向の有無とナショナリスティック／ネオリベラルな意識



# 【参考】 SESとナショナリストイック／ネオリベラルな意識



# 研究上の問い合わせに対する答えと示唆

## ○ 研究上の問い合わせ

大学で留学教育を受ける前の新入生の心理構造において、グローバル（コスモポリタン）志向とネオリベラル／ナショナリストイックな意識はどのような関係にあるのか

## ○ 答え

ネオリベラル／ナショナリストイックな意識は、高次因子「グローバル志向」の一部を構成する因子であり、

「グローバルな連帯意識」「異文化への関心」といったコスモポリタンな意識と運動しながら生じている可能性が示された

## ○ 示唆

留学教育において、先行研究で批判されてきたコスモポリタニズムの変種（“Pragmatic Cosmopolitans” “Neoliberal Global Citizenship” 「コスマティックな多文化主義」 etc...）の形成につながる土壌が存在している可能性



効果検証に際して、これらの心理構造とその変容をとらえる測定が必要ではないか

# 考察 ①コスモポリタニズムとナショナリズムの融合

---

## ○ なぜ「日本のために活躍」という論理が生じるのか？

- ・高騰する留学コスト、国や自治体の経済助成に伴う審査と研修
  - ・「トビタテ留学JAPAN!」の選抜審査で求められる  
「やりたいこと」と「社会貢献」のすり合わせ（太田 2023）
  - ・某県の高校生海外留学プロジェクト事前研修での講話  
「皆さんの渡航費の大半は税金によって賄われています」  
「感謝の心を忘れず、貴重な機会を活かして成長し、  
将来は県や国に貢献できる人材になってください」

グローバリズムのイデオロギーのもとで留学教育が商品化されるネオリベラルな構造を背景に、国家の制度的支援におけるインフォーマルな教育作用を通じてナショナリズムが形成される構造があるのではないか？

→ポッケをはじめとするグローバル正義論の規範とは対立する

## 考察 ②コスモポリタニズムとネオリベラリズムの融合

### ○ なぜグローバルな経済競争を平等とみなし、適者生存を肯定するのか

- ・グローバル志向の高さは大学の入試難易度の高さと関連（小林 2024）

→入試難易度の高い大学に進学する学生は、公平な学力選抜競争に勝利することで将来の豊かな社会的地位が得られるという、  
メリトクラティックな信念が相対的に強い可能性がある



本研究のサンプルが国立大学新入生であることを考慮する必要

### ○ 他方で、移民に対するマインドはネオリベラルではなく包摂的

→異質な他者を思いやる気持ちは生じるが、自身が有利な立場にある  
現在の国際的な経済格差構造を批判的に問い合わせ直す志向性は弱い傾向

# 今後の課題 ①両イデオロギーを下位次元の概念まで分解する

## ○ ネオリベラリズムをさらに分解して検討する必要性

- ・ネオリベラリズムの下位次元：

「競争主義／反平等主義／反福祉主義」（丸山 2011; 米田 2019）  
「自己責任意識」（坂本 2021）

## ○ ナショナリズムをさらに分解して検討する必要性

- ・ナショナリズムの下位次元：

「愛国主義／純化主義／排外主義」（田辺 2011）

- ・どの次元が、なぜ望ましい／望ましくないのかを、当為論のレベルで検討する（例えば、「排外主義」は低減するべきだが、「愛国主義」は必ずしも問題ではないかもしれない）
- ・コスモポリタニズムと連動している次元や、留学移動によって強まる／弱まる次元を明らかにする

## 今後の課題 ②現代的なコスモポリタニズムの理論的検討

### ○ 一定のネオリベラルさを許容したコスモポリタニズムの模索

- ・人的資本の形成を目指した教育政策は全世界的な動向
- ・海外渡航費用の高騰、国や自治体による経済支援の重要性の高まり
- ・各大学における留学派遣助成のリソースの多くが公的資金を原資として各大学に選択的に配分されている (ex. 海外留学支援制度) 以上、国際交流を担当する教職員は、(学術的動機以前に) 国にとって望ましい留学効果を、なるべく穏やかなKPIとして設定せざるを得ない

これらの社会状況と留学研究者のポジショナリティを相対化したうえで、現実的なコスモポリタニズムの在り方を検討する必要がある

### ○ 一定のナショナリズムを許容したコスモポリタニズムの模索

- ・根づいた (rooted) コスモポリタニズム (Appiah 2006)

「すべての外国人を見捨てるナショナリスト」ではなく、「身近な友人や同胞を冷淡な公平さで扱うハードコアなコスモポリタニズム」でもなく、「部分的な (partial) コスモポリタニズム」

# 参考引用文献

- Appiah, K. A., 2006, *Cosmopolitanism: Ethics in a World of Strangers*, W W Norton & Co Inc.
- Brown, W., 2015, *UNDOING THE DEMOS: Neoliberalism's Stealth Revolution* (=2017, 中井亞佐子訳『いかにして民主主義は失われていくのか：新自由主義の見えざる攻撃』みすず書房).
- Delanty, G., 2000, *Citizenship In A Global Age* (=2004, 佐藤康行訳『グローバル時代のシティズンシップ：新しい社会理論の地平』日本経済評論社).
- Engel, L. C., Rutkowski, D., Thompson, G., 2019, "Toward an International Measure of Global Competence? A Critical Look at the PISA 2018 Framework", *Globalisation, Societies and Education*, 17(2).
- 橋本憲幸, 2021, 「教育のグローバル正義とは何か」『教育学年報』12: 51-68.
- Hett, E. J., 1993, *The development of an instrument to measure global-mindedness*, Doctoral dissertation, Available from Pro Quest Dissertations & Theses database.
- 河野哲也, 2015, 「コスモポリタニズムとその敵—政治と形而上学」『哲学論叢』42: 1-13.
- 小林元気, 2024, 「異文化間異動と〈グローバルな資質〉の関係—日本の大卒若年層のグローバル・マインディッドネスに着目して」『異文化間教育』59: 16-35.
- 丸山英樹, 2016, 「国際イニシアチブと学力観が描く市民像」北村友人編『グローバル時代の市民形成』岩波書店, 45-72.
- 丸山真央, 2011, 「ネオリベラリズム—その多元性と対立軸の交差」田辺俊介編『外国人へのまなざしと政治意識—社会調査で読み解く日本のナショナリズム』勁草書房, 119-140.
- 水松巳奈, 2023, 「客観的評価に基づいて検証した大学生のグローバル・コンピテンスの変容と特性から見た課題と可能性」『東洋大学国際教育センター紀要』1: 27-41.
- 中村絵里, 2024, 「短期留学はグローバル市民の育成に寄与するか—分析ツールBEVIを用いた「全員留学」の評価」『留学生教育』29: 11-22.
- Nussbaum, M., 1996, "Patriotism and Cosmopolitanism" in Cohen ed. *For Love of Country: Debating the Limits of Patriotism* (=2000, 辰巳伸知・能川元一訳『国を愛するということ』人文書院) .

- 大西好宣, 2019, 「短期留学及びその教育効果の研究に関する批判的考察：満足度調査を超えて」『JAILA JOURNAL』5: 51-62.
- 大澤真幸, 2014, 「ネイション／ナショナリズム—定義不能なるもの」大澤真幸他『ナショナリズムとグローバリズム—越境と愛国のパラドックス』新曜社, 14-26.
- 太田知彩, 2023, 「「グローバル人材」とは誰か？—シンボリック・バウンダリーの視点から」『教育社会学研究』113: 5-26.
- Pogge, T., 2008, *World Poverty and Human Rights* (=2010, 立石真也監訳『なぜ遠くの貧しい人への義務があるのか—世界的貧困と人権』生活書院) .
- 坂本治也, 2021, 「新自由主義は市民社会の活性化をもたらすのか—自己責任意識と市民的参加の実証分析」『選挙研究』37(1): 5-17.
- 塩原良和, 2012, 『共に生きる—他民族・多文化社会における対話』弘文堂.
- Shultz, L., 2007, "Educating for global citizenship: Conflicting agendas and understandings", *The Alberta Journal of Educational Research*, 53(3): 248-258.
- 鈴木弥香子, 2023, 『新しいコスモポリタニズムとは何か—共生をめぐる探究とその理論』晃洋書房.
- 田辺俊介, 2011, 「ナショナリズム—その多元性と多様性」田辺俊介編『外国人へのまなざしと政治意識』勁草書房.
- 恒吉遼子, 2016, 「教育における「グローバル人材」という問い」北村友人編『グローバル時代の市民形成』岩波書店, 23-44.
- Weenink, D., 2008, "Cosmopolitanism as a Form of Capital: Parents Preparing Their Children for a Globalizing World", *Sociology*, 42(6): 1089-1106.
- 李修京・車ボウン・權五定, 2023, 「韓国におけるナショナリズムと多文化教育の整合性問題」『東京学芸大学紀要人文社会科学系』75: 73-89.
- 米田幸弘, 2019, 「政党支持—イデオロギー対立軸はどのように変化しているのか」田辺俊介編『日本人は右傾化したのか』勁草書房, 137-161.